

船釣りの作法

【連載】※月1掲載

釣技
釣技
釣技
釣技

アカムツに出会うために「誘い」よりも大切なこと

鈴木新太郎

其三 茨城県波崎沖のアカムツ



波崎沖のアカムツは夏からカンネコを舞台に盛り上がる



▲2ノット近く潮が流れることも珍しくない。タックルには軽さだけでなく粘りとパワーも求められる



◀水深130～150メートル。茨城県海域は浅い場所アカムツが釣れる



中深場の人気ターゲット・アカムツを1000番の電動リールと細身のゲームロッドで楽しむ。1尾のアタリと引きを存分に味わえるタックル選びは、釣りを豊かな遊びにしてくれる

「アカムツ釣りにかぎらず『誘い』という言葉がよく使われますが、ぼくはよく分からないから使わないんです」

耳を疑うが、鈴木新太郎さんは真剣だ。いわく、竿を動かす動作を誘いとするれば、なぜ動かすのか、その時仕掛けはどうなっているのか、そして魚にそれがどう影響するのか。誘いという言葉にまともにしてしまうと、そのプロセスやイメージが置き去りにされてしまうのではないかと……。

「たとえば、波崎沖ではアカムツは竿を持って誘わないと釣れないと言われます。でも、海中をイメージすれば、それは『エサが漂っているときしか食わない』と考えられます。では、エサが



○鈴木新太郎 千葉県出身の船釣りのエキスパート。得意とするフィールドは千葉県外房から茨城県鹿島灘・常磐まで至る。シマノフィールドテスター

タックルの作法

進化したタックルはアカムツなど中深場の釣りをさらに身近にしてくれます。

▲探見丸親機搭載船ではNEW 海底・魚群水深表示で状況を知ることができる
※魚群水深表示はアキフィッシュ対応の親機搭載船のみ使用可能



◀右底ダチの取り直しが多いアカムツなど中深場の釣りではスピードクラッチのスムーズさが際立つ



▲新太郎さんが「とても有効」と言うNEW タッチドライブの中間速設定。引きが強く口切れしやすいアカムツでは「12」がおすすめ



▲右手でハンドルを巻きながらNEW タッチドライブをON、合わせから巻き上げまで途切れることなく不意のバラシも減る



▲電源ケーブルがハンドル側にあるSコンパクトボディはパーミング性がよく、NEW タッチドライブをコントロールする操作性が高い



▲MUTEKI MOTOR+により3000番クラスのパワーを、ビーストマスター1000EJ同様の強化ギアシステムを採用により高耐久性を実現

食の作法

一尾のアカムツで三つの食感を楽しむ至高の刺身



鈴木新太郎おすすめ【アカムツ刺身三種】

- ①アカムツを三枚におろす
- ②血合骨に沿って腹側と背側に切り分け、腹側の身は皮を引いて刺身に
- ③背側の身は皮を付けたまま切って炙りに
- ④尾に近い身は薄く切って身質を楽しむ



「船釣りの作法」動画公開中。
SHIMANOTV または YouTubeSHIMANOTV 公式チャンネルにてご視聴いただけます。

[NEW フォースマスター1000]

◎「アタリに合わせて、ハンドルを巻きつつハリ掛かりさせ、電動巻き上げに移行する間は動作が止まらないほうがいい。これは手持ちでアタリを出させて掛けていくアカムツなどの中深場釣りでは重要。それを自然にできるのが、NEW フォースマスター1000を使って一番素晴らしいと思うところで、一度体験したら手放せません。これにはワンタッチで理想の巻き速度に到達するNEW タッチドライブの「中間速設定」が大きく役立っています。力強さとコンパクトさは使ってみれば一瞬で分かるほど。中深場の釣りをより身近にしてくれるリールです (鈴木新太郎)」
●ギア比5.3、最大ドラッグ力15kg、自重680g、糸巻き量PE2号600m、3号400m、4号300m、最大巻上長70cm / ハンドル1回転、シマノ巻上力62kg、実用巻上持久力8.5kg、最大巻上速度210m / 分

実際、仕掛けが着底し、底ダチを取り直しても道系が大きく流されることがなくなりました。ここで新太郎さんは、サバを恐れず、積極的に竿を上げ、下ろし、底ダチを取り直す。「竿を上下させて止めると(道系が立ちやすい今の状況なら)、エサの付いたハリはフワフワと漂います。沈んでハリスが張るまでの間に、アカムツが食ってきます」
イメージどおりの仕掛けと動作で、狙いどおりアカムツの明確なアタリが竿先に出た。ようやく巡ってきたチャンス逃さず、新太郎さんは終了まで釣り続ける。「サバの泳層が変わったことで、状況の変化を感じ、集中できました。状況がよくて、仕掛けも動作も迷いがなけ

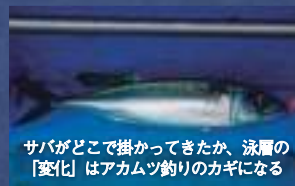
れば、あとは落とせば食ってくると思えるものです。そうですね……まとめると、アカムツ釣りで一番大切なこと、それは、変化を見逃さず、チャンスをつかむことです」
入念な準備と確実な動作を前提に、変化を逃さない。これが、鈴木新太郎流・アカムツ釣りの作法である。

アカムツの作法

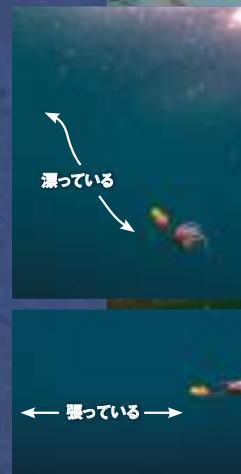
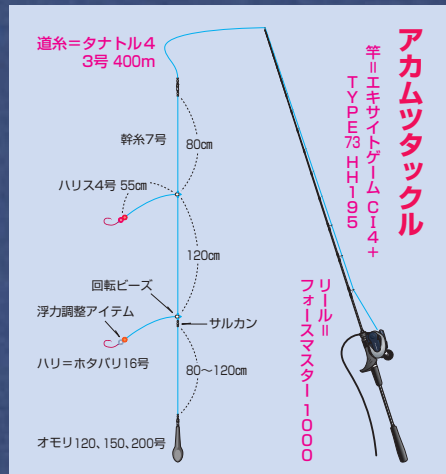
入念な準備と確実な動作。変化を見逃さなければアカムツは釣れます。

▲ハリスの長さ、浮力調整アイテムの数、捨て糸の長さなど、前情報を生かして釣れている仕掛けを準備 (ハリ数は2本まで)

▲エサは船倉に準備されているホタルイカを使用。目の周りにハリを刺し、外套膜を抜く



アカムツがエサを食うときの仕掛けの状態を作り出すべく竿を動かす。誘いではなく「作業」と新太郎さんは言う



◀底ダチを取り直したり、竿を上げて下ろしたときの釣り同、エサは自然に漂う。この状態を作り出す

◀横でも縦でも、ハリが重さや潮の抵抗によりハリスが張った状態ではアカムツは食ってこない

漂う状態を作り出すにはどうしたらいいか? その答えのひとつが仕掛けの寸法や浮力調整アイテムなどです。エサとハリをどう動かすかは、入念な準備の上に、仕掛けや海の状況によって変わるわけです」
つまり、魚の口から答えをたどっていけば、動作と仕掛けは表裏一体。誘いという言葉では表現しきれないのだ。波崎沖の水深130~150メートルを狙ったこの日、新太郎さんは数多くの仕掛けを準備、船に用意されているホタルイカを付けて釣り始めた。
手にしているのはNEW フォースマスター1000とエキサイトゲーム C14+ Type73 HH195。見た目にも、実際に手に持っても、一番前の中深場の釣りからは想像できないほど軽量がスマートなタックルだ。
潮は速く2フット近い。道系は潮の抵抗を受けて押され、底ダチを取り直すほとんど出でいく。
「この状況では竿を上下させてもハリスは張っているでしょうから、底を取直したわずかな間がチャンスです」

その後、表層近く30~50メートルでサバが掛かり、仕掛けがなかなか海底に届かず、底に着いても速潮に引つ張られてアタリが出ない展開が続く。数時間がたったところ、水深150メートル付近でサバが掛かるようになる。ついに海底まで……と顔をしかめたくなるのだが、新太郎さんは逆、この変化をチャンスと見た。
「サバの食ってくる層が変わるときは、潮が変わることが多々あります。表層は相変わらずでも、潮が落ち着いてきたのかもしれない」

新太郎さんは確実な投入と底ダチの取り直して朝のチャンス逃さずアカムツを手にする。
その後は表層近く30~50メートルでサバが掛かり、仕掛けがなかなか海底に届かず、底に着いても速潮に引つ張られてアタリが出ない展開が続く。数時間がたったところ、水深150メートル付近でサバが掛かるようになる。ついに海底まで……と顔をしかめたくなるのだが、新太郎さんは逆、この変化をチャンスと見た。
「サバの食ってくる層が変わるときは、潮が変わることが多々あります。表層は相変わらずでも、潮が落ち着いてきたのかもしれない」

[エキサイトゲーム C14+ Type73 HH195]

◎「細くて軽くて、何より曲がりやすいのに、すごくしっかりしている。今日みたいに潮が速く道系が引つ張られて竿に負荷が掛かった状態でも、自分の動かしたい方向にコントロールできます。これがエキサイトゲームのブランクス・ハイパワーXフルソリッドの特徴で、中深場であっても魚との駆け引きを視覚・感覚の両方で楽しませてくれます (鈴木新太郎)」
●Type73 HH195=全長1.95m、総数2、仕舞寸法150.4cm、自重178g、先径1.5mm、オモリ負荷60~180g、カーボン含有率84.5%

▲73HHは全ガイドダブルフットガイドを採用したヘビーデューティー仕様
▼中深場での手持ちには、疲れず、力を入れやすいXシートエクストリームガングリップが最適

